



1 稽古で、団員たちに手取り足取り教える蜷川幸雄。 2 蜷川のダメ出しを真剣な表情で聞き入る団員の百元夏緒さん。 3 初日当日、団員たちに本番に向け最後に話をする蜷川。「あとは頼むよ」。 4 初めての本番を終えたばかりの、高揚した顔、緊張した顔の団員たち。 5 楽屋に戻り、観に来ていた友人から花束をもらい嬉しそうに団員の神尾富美子さん。左は共演した原田琢磨さん。 6 初日本番後、楽屋に来た蜷川さんを迎える団員たち。自然に拍手が巻き起こる。

団員たちは、日々、急激に成長して来ているように見える。3カ月前に初めて演劇を始めた人も多いのだから、それを思うと格段の差だ。演出はもちろん、照明や大道具などプロの人たちの仕事に支えられることで生まれた、“役者”としての自覚がそうさせるのだろうか。しかし、蜷川が目指すものは、もちろん、もっともとはるかに高い。

「そんなんじゃ、お客さんに500円返さなきゃいけないよ」

今回の発表会の入場料は1,000円だ。「ただだと予約だけで来ない人もいるかもしれないし、お客さんにも育ててもらおうと思って」という蜷川の考えからだが、あとの500円とはセットの“水槽”代。つまりは演技はお金をもらうにふさわしくないから、その分の500円を返すということ。果たして、本番はどうなるか。

いいものを作るには 勇気を持って捨てることも大切

7月27日 本番前日。稽古前に、蜷川から団員に話があった。

「明日、みなさんの演技を観て、いろいろ周囲から言われるだろうけど、気にしないこと。それに左右されると演技が変わっちゃうから。プロはそういうことに揺るがない。我々ができるところまでやってきた。すごくいい瞬間もある。あとは僕らを信じて」

演出の井上尊晶さんが続けた。「ある程度のライフラインはできていると思っている。方向性は間違っていない」

この日、蜷川は決断したことがある。2部でやろうと思っていた、『三人姉妹』の一幕をすべてカットしたのだ。今日まで稽古を重ねてきたが、「まだ客に見せる段階ではない」と上演をやめた。

「いいものを作るために、捨てることは大切だ」自身の苦い過去の経験を語りながら、団員に説明する蜷川。プロとして幾度も修羅場をくぐってきた人間ならではの決断だった。

7月28日 初日。「稽古の時のように機は飛ばせないから、(演出家は)お嫁にやった娘をハラハラ見守っている父親のようなもの。まあ、頼みますよ」と、蜷川に送り出された団員たち。楽屋では、仲間と大声で歌を歌ってリラックスするもの、一人の世界に入り、ぶつぶつとセリフを繰り返すものと様々。……そして本番を迎えた。

俳優は観客の眼差しの中でしか成長しない

この日以降、千秋楽まで連日、満席だった観客は、テレビや雑誌などの報道を通し、さいたまゴールド・シアターの活動を以前から知っていた人や、演劇関係者も多く、各方面から

の関心が高いことがわかる。「感動しました。体が震えて涙が出そうだった。すごいですね。こんなふうになれるのかと思いました」(63歳・女性)

「二十数組ものチー子と灸の同じやりとり、それぞれの組に味わいがあって、全くゆるみなく見通しました。あれが若い役者たちだったら途中で飽きたと思う。俳優の上手い下手とは何か、惹きつける力とは何か、など考えさせられました」(翻訳家・松岡和子氏)

「彼らが俳優としてどうかということよりも、自分の足でしっかり立っている人が精一杯やっていることに感銘を受けました。そういう意味で得るものはありましたね。馴れ合ってしまうということから引き戻してくれますから」(俳優・唐沢寿明氏)

一方では、観客の前で演じることが生まれて初めてだった人も少なくない団員たちは、その洗礼を受け、公演の間でさらに成長したようだ。この点でも「俳優は観客の眼差しの中でしか成長しない」という蜷川の狙いは見事に果たせられたようだ。

「楽しかった。けれど、あれだけ練習したのに、タイミングがずれてうまくセリフが言えなかった。(演劇は)もっともっと奥が深いんだということがわかっただけでもよかった」(団員の葛西弘さん)

「初日が開けるまで、(上手く出来る時とそうでない時の)浮き沈みが激しかったけど、お客さんを前にすると、伝えようという気持ちが自然に出てきました。やってよかった」(団員の小淵光世さん)

ここに至るまで、団員たちの記憶力や体力などを確かめながら手探りで稽古をし、「毎日が試運転。時々どこかにぶつかる」思いをしてきた蜷川も、「初日の出来は55点だな」と厳しい点をつけながらも、一方では手応えを感じているようだ。

「劇の概念をはずれて、戯曲を離れて成立することがある。その人の生きてきた文脈でみるとそうなるのか。だから、紛れもなく見たことがないような、驚く瞬間がある。それは職業的な俳優には出来ないことだ」(蜷川)

さいたまゴールド・シアターが既存の職業的な俳優に対して、なんらかの問いを投げ掛ける存在になれば、というのは、蜷川がこの劇団を始めた大きな理由のひとつだろう。その思いがあるから、「毎日、俺が団員たちから試験を受けているみたい」でも、蜷川は走り続ける。

千秋楽、「今日のはうまくなっている。5日間の間でも変わるもんだね。今日は80点」と言い残した蜷川。夏休み明け、9月から再び始まるレッスンで、団員たちはどんな成長を見せてくれるのだろうか。

「さいたまゴールド・シアター」 団員紹介

「埼玉アーツシアター通信」では、47名の団員すべてをご紹介しています。役者を目指し、毎日、頑張っている団員にご注目。

団員のみなさんへの質問
1. 入団の動機 2. 入団後、一番嬉しかったこと 3. 一番大変だったこと 4. 中間発表会への意気込みは?

倉澤誠一(くらさわせいいち)さん 61歳
20年近くある演劇活動の経験を生かし、独特な存在感で団員のみなさんを刺激する存在の倉澤さん。昔に比べると「セリフ覚えや動きが悪くなった」と嘆きつつ、「その分、人生経験で補いたい」と日々意欲的に取り組んでいる。目標はもちろん、「いつかは大ホールで、蜷川さんで……」。

- 20代の頃、いい加減な演劇青年だった。それが元で定職にもつせず、61歳になった。さすらい続けた人生の終着駅にしようと思募した。
- 蜷川さんに出会えたこと。
- 股関節症のため普通に歩けません。ごまかしながら稽古しています。誰か手術しないで治す方法を知りませんか?
- 若い頃比べ、体力と度胸がなくなった。昔とった柄でやるしかないから……。

上村正子(かみむらまさこ)さん 58歳
以前に比べ、やせて「引き締まった」と周囲から言われるという上村さん。「好きなことのある幸せを感じています」

- 小学生の頃、教科書の音読が好きで、演じることに興味を持っていました。司会や朗読を学んでいた時期もありますが、50代になって、やっぱり芝居がしたい、自分を表現したいと思いついて募集を知りました。
- 台本を手にした時。「声に出して言いたいこと」が、「言いたい言葉」が、そこにはたくさん書かれていました。
- 背伸びの朝寝坊が、毎朝5時半に起きることが何より大変でした。睡眠不足と闘いながらも、好きなことをやるのなら起きられるのだと知りました。
- 創られていく過程が好きです。「セリフを覚えること」「五感を鋭く、アンテナをいっぱい立てておくこと」うーん、あとは? 私にとっては未知の世界。役者として発展していく自分であることを実感したいです。

北澤正昭(きたざわまさあき)さん 64歳
中間発表会で、冒頭のセリフを言うことになった北澤さんは、ヴォイスのやまもとりご先生や、共演の俳優、前川遥子さんにも指導を仰ぎ、自主的な稽古にも熱心。

- 潜在的に変身願望があったか。蜷川さんの「身体表現者、その可能性に賭けてみようと思う人」という言葉に触発されたのが決め手。この小躯体全身を使って何かを表現してみたい、という気持ちになった。
- 蜷川さんに、(芝居の最初のセリフを言う役として)イの一番に名前を呼ばれたこと。ヤツタという気持ちとオレでいいのかという気持ちが一瞬錯綜、返事が遅れた。トップバッターの重責を果たせたのかどうか……。
- ダンスも日舞も、踊ることは楽しいが、ステップや振りを覚えるのは大変で、結構キツイ。
- 道具や照明、音響、衣裳など、プロのスタッフに囲まれて本番準備が進んでくると、いよいよヤラざるを得ないという気持ち。

小林博(こばやしひろし)さん 80歳
男性団員の中で最高齢の小林さんは、若かりし頃、フレッド・アステアに憧れていたものの、演劇活動などはしたことがなかったという。さいたまゴールド・シアターのオーディションに合格して、いよいよこれからはと、突然メニエール病に見舞われ、立ち上がる目眩が襲うなか、練習をこなして来た。中間発表会には、息子さん夫婦も観に訪れた。「自分のセリフを言う前は、いつもドキドキしています」。

- 身体表現力に自分の活力を見出したい。元気うちに習いたいと思った。
- セリフを覚えるのに女性グループが協力してくれて、励まされる。頭の活性化につながりそう。
- 日舞、ダンス等体力的にコントロールしていくのが大変だった。セリフの暗記も同様。
- 頑張っていくっきゃない。楽しいから。



小林允子(こばやしちかこ)さん 62歳
専業主婦だった小林さんは、今まで演劇とは無縁。さいたまゴールド・シアターへの参加は、しばらく家族にも秘密だった。「日常から離れた自分になりたい気持ちがあります」

- 自分の中にあるいろいろな人格、新しい自分の表現への願望、物事や人物の客観的な見方への探求……この年齢でもそれらの可能性があるのではと思ったこと。
- 初めてのセリフ稽古の際、蜷川さんのご指導を受けることができたこと。
- それぞれの講義の中でいろいろ教えていただくことに対し、自分がその通りに出来ないもどかしさは多いに感じるが、大変だとは思わない。能力的、性格的に自分の短所を知り、それを克服することが大変。
- 多くの方々のご協力あってこそこの発表であることに感謝しつつ、本公演につながる発表であることを意識して世間に認められるように頑張りたい。

重本恵津子(しげもとえつこ)さん 80歳
中間発表会本番を迎え、より緊張感が高まる中で団員全員が成長していることを実感しているという重本さん。「蜷川さんの一言一言が血の中に流れている感じがします」

- 終戦直後、北九州の詩人グループで、新しい文化を目指して自立劇団を創立しました。7、8年活動が続けたのですが、その後、別のことに従事し、80歳の誕生日を迎えて学習塾を閉じた時、偶然に蜷川先生の呼びかけを新聞で知ったので、演劇で最後を締めくくりたいと思いました。
- 蜷川先生の言葉に接すること。良き師との出会いは、人生最高のものです。80歳になって、それが果たせるとは奇跡です。
- セリフを覚えること。若い時は記憶力抜群だったので悲しくなります。でもめげずに努力する以外にはなさそうです。
- 日舞が苦手なので、練習にもっと励みます。長男(43歳)次男(39歳)が物心ともに援助してくれていて、発表会を楽しみにしているのでも、しっかりやろうと思います。

神尾富美子(かみおふみこ)さん 70歳
動機をやめてから、様々な習い事をして何もしない空しさを埋めようとしたが飽き足らなかった神尾さん。今は「こんなに楽しいことってあったかしら」と思うほど夢中。

- 70歳の誕生日に高齢者劇団募集を知り、運命的なものを感じた。演劇とは無縁な人生を歩いて来たはずなのに、「経験不問」という字が勇気づけてくれた。何かにチャレンジするのは今しかない。応募書類を出した時の自分の手の震えが今でも忘れることが出来ない。
- 新しい世界に迷い込み夢中で過ごした二ヶ月余。その中でもやはり一番は、蜷川先生の手探りで演じたチー子(戯曲「明日そこに花を挿そうよ」の役)であつたらう。
- セリフを暗記すること。新しいことを覚えること。
- 団員の1人として恥ずかしい姿を勇気をもって外部の方々にも見ていただきます。心の中で1年後には絶対変わってみせます……と叫びながら。

佐藤禮子(さとうれいこ)さん 73歳
山形県に疎開していた時に、演劇部に所属していた佐藤さん。さいたまゴールド・シアターの活動を通し、「その苦勞と努力があるからこそ、ものをつくることの大変さもわかるようになったし、芝居でも映画でもより深く面白く見られるようになった」という。

- 年齢的に上限がなかったこと。学生時代、演劇部において、夢を実現したかったこと。日舞、三味線、民謡、フラダンス、端唄、詩吟等を稽古したので、何かに役立つかと思ひ、応募しました。
- テレビ、映画の見方が変わったこと。役者の苦勞、ものづくりの大変さを知ったこと。また、蜷川先生の指導を受けられたことです。
- 短期間でセリフを暗記すること。
- 全国の元気がない老人たちに、私たちのパワーを見せてあげて、元気になってもらいたいと思います。